

追悼 後藤田正晴

「九・一一」総選挙に際して、自民・公明両党
得した。この結果を受けて、小泉純一郎（内閣総
理大臣）の首班指名、第三次内閣の発足といった
政治日程が進んだ九月二十一日の朝、後藤田正晴
（元内閣官房長官、元副総理兼法務大臣）の逝去の
報が伝わった。

後藤田を評する際に半ば定型的に指摘されるの
は、「カミソリ」と「ハト派」という二つの相貌
である。

筆者にとつては、後藤田は、政治家という職務
の持つ「峻厳さ」を最初に印象付けた人物であった。
一九八三（昭和五十八）年、大韓航空機撃墜事件
の折に中曽根康弘内閣時の官房長官として日本政
府の対応を説明していた後藤田の表情は、当時、高
校生であった筆者には誠に畏怖すべきものと映っ

我が国の「普通の国」への気運が高まる中、後藤
田において強調されるようになったのは、「カミ
ソリ」としての相貌ではなく、専ら「ハト派」と
しての相貌であった。

筆者は、一〇年近く前、二、三十代の若手の人々
が後藤田を招いて話を聴くという趣旨の会合の席
で、一度だけ後藤田に身近に接したことがある。

筆者が記憶しているのは、席上、改憲気運の高ま
りについての論評を求められた後藤田が、表情を
強張らせたことである。後藤田は、特に自らから
見れば孫の世代にあたる人々が、憲法典改訂を通
じた「普通の国」への志向を支持している現実
は、不安を覚えたであろう。後藤田は、そうした
世代が「暴力装置」を使うに足る見識と覚悟を有
すると信じていなかったようである。筆者は、後
藤田が「護憲」を標榜した背景には、そうした下
の世代に対する不信の感情があると読んでいた。
要するに、後藤田の護憲論は、「使いこなせない
なら最初から使えな」という趣旨であったろう。

後藤田の姿は、コリン・L・パウエル（前米国
国務長官）に似通っている。パウエルもまた、湾
岸戦争時には統合参謀本部議長を務め、イラク戦
争開戦時にはジョージ・W・ブッシュ政権内で開

た。振り返れば、戦後の政治家の中では、後藤田
は、国家の持つ「暴力装置」に手を掛けることの
意味を熟知する稀有の存在であった。軍隊の使用
が現実の選択肢たりえなかった戦後の歲月の中で、
後藤田は、連合赤軍あさま山荘事件に代表される
極左過激派の破壊活動が頻発した昭和四十年代中
葉の時期に、「暴力装置」としての警察を実質的
に運用する総元締の立場にあった。また、後藤田
は、法務大臣時代には複数の前任大臣が躊躇い続
けた死刑執行を再開している。このような挿話は、
後藤田が「カミソリ」の異名を持った事情を十分
に納得させるものであった。ちなみに、政治学に触
れ始めた頃の筆者は、後藤田と塩野七生（作家）の
交流の様子に惹かれていた。塩野が後藤田をニコ
ロ・マキアヴェツリに擬えた文章に接した折には、
筆者は、「カミソリ」という後藤田の異名が、むし
ろ好ましい意味合いを持つものであると理解した。
ところで、後藤田が示した「ハト派」として
の相貌は、かなり複雑な意味を持つ。後藤
田が「ハト派」の相貌を持ったのは、昔日の社会
党のように観念的な「平和主義」に対する帰依の
ゆえではなく、「暴力装置」に手を掛ける危険を
熟知するがゆえであった。特に一九九〇年代以降

戦に難色を示し続けた。後藤田もパウエルも、警
察や軍隊といった「暴力装置」が使われる際の現
実を知るがゆえの「ハト派」であったのである。

「九・一一」総選挙の結果、自民・公明の政権
手中に収め、第一野党たる民主党では党代表の座
が岡田克也から前原誠司に移った。外交・安全保
障領域の論客として知られる前原が持論の方向で
党内を導くことができるならば、そして自民・公
明両党と民主党との協調が成れば、我が国は、憲
法典改訂を通じて「普通の国」への脱皮に向けた
歩みを一挙に進めることになる。それは、生前の
後藤田にとつては、「眼にしたくない光景」であ
るかもしれない。しかし、我が国が「普通の国」
に脱皮した後こそ、後藤田が「ハト派」と呼ば
れた意味は、絶えず省みられるべきであろう。

その意味では、筆者は、後藤田における「カミ
ソリ」と「ハト派」の二つの相貌は、次のような
ことを問い掛けていると考えている。「私は、生涯
を懸けて国家という『凶暴な怪物』を飼ひ慣らした
諸君は、どうなのか。我が国の次代の人々にとつ
ては、「普通の国」としての歲月は、そうした問い
に答えを示し続ける歲月ではなからうか。」

櫻田 淳

時評2005

※記事・写真等は中央公論新社の
許諾を得て転載しています。
著作権は中央公論新社に帰属。
記事、画像等の無断転載は一切
お断りします。



さくらだじゅん
政治学者・東洋学園大学専任講師